

柿本人麻呂と世界文学

青山学院大学院文学部日本文学教授・
国際センター所長

小松 靖彦

1. 世界に開かれた柿本人麻呂の文学

【資料1】インド・ビショバロテイ（タゴール国際大学）での柿本人麻呂「泣^{きゅう}血^{けつ}哀^{あい}慟^{たい}歌^か」（萬葉集巻一・二〇七〇～二二二）についての講義への学生たちの感想

◇千年以上前の作品なのに悲しみが直接心に伝わってくる。

◇「泣血哀慟歌」に刺激を受けて、悲恋の詩を作った。

【資料2】インド・ルルカタでの講演 The Sacred Power of Water: Focusing on the Man. yoshu and the Works of Rabindranath Tagore 1915 by Mykkohta の記事（二〇一三年八月二三日）〔日本語訳は小松〕

*リビンドラナート・タゴール（一八六一年～一九四一）はインドの近代詩人。生と死を連続するものと捉える哲学を詩によって表現。西洋の「力による征服」を激しく批判し、イギリス統治下のインドの社会的弱者に限りないエンパシーを寄せた。

「…」人麻呂の作品のテーマは、「別離と愛」であり、この概念の筋道（糸）は、タゴールのいくつかの作品（短編小説「妻の手紙」や、「愛」の題のもとに集められた、*Geetabitan*の第2巻の恋歌）に力強く編み込まれているようである。

【資料3】リビンドラナート・タゴール『人間の宗教』（マクミラン、一九三一年刊）〔日本語訳は小松〕

「…」芸術や文学は、我々がどのような国、どのような時代に属しているようにとも、当

然の権利として要求できる我々（人類）の共通遺産である。あふれるばかりの富 the
superfluity of wealth じゅぶね。

【資料4】青山学院大学文学部日本文学科編『文学交流入門』（武蔵野書院、二〇一三年九月刊）

「…」世界のさまざまな人々が、日本文学を人間文化の果実の一つと捉え、新たな文学・文化の可能性を見出そうとされていると考えられます。今や日本文学は、日本国内だけに閉じられたドメスティックな文学ではなくなっているのです。それゆえ、日本文学における海外文学の受容だけでなく、日本文学が海外の文学・文化・社会に与えた影響を考え、日本文学と海外文学が出合うことで誕生したハイブリッドの文学や、日本文学と海外文学とが、それぞれ独自のバックボーンを踏まえながら提起している人間の普遍的テーマなど、〈文学交流〉を見極めることが必要となってきました。

2.〈水〉の詩人・柿本人麻呂

【資料5】柿本人麻呂作品の〈水〉

- 1 雨^{あま}川^{みづ}「天^{あま}つ水^{みづ}」(巻二・一六七)など
- 2 川^{あすか}川^{あすか}明日^{あすか}香^{あすか}川^{あすか}(巻二・一九四)、吉^{よしの}野^{よしの}川^{よしの}(巻一・三六〇三九)、痛^{あなし}足^{あなし}川^{あなし}(巻七・一〇八七、一一〇〇)など
- 3 池^{いへん}巨^{いへん}椋^{いへん}池^{いへん}(巻九・一六九九)
- 4 湖^{おつみ}琵琶^{おつみ}湖^{おつみ}「近^{おつみ}江^{おつみ}の海^{おつみ}」(巻三・二六六、巻一・二四三五)、巻一・三〇、

5 海川瀬戸内海(巻二・三三〇～三三三、巻三・二四九～二五六)、「石見の海」
(巻二・一三二、一三五)など

* “水中に横たわる死者”としての入麻呂のイメージ(巻二・二二四、二二六)

【資料6】柿本朝臣入麻呂が泊瀬部皇女と忍坂部皇子とに献る歌一首(※長歌冒頭)

飛ぶ鳥の 明日香の川の 上つ瀬に 生ふる玉藻は 下つ瀬に 流れ触らば 玉藻
なす か寄りかく寄り 靡かひし 婦の命の…… (巻二・一九四)

〔訳〕飛ぶ鳥の明日香川の上の瀬に生えている美しい藻は、下の瀬に靡き流れて触れ合っている。その藻のように、あちらこちらへと靡き合った妻の君の……〕

【資料7】溺れ死にし出雲娘子を吉野に火葬りし時に、柿本朝臣入麻呂が作る歌二首(※うち一首)

やくもさす 出雲の児らが 黒髪は 吉野の川の 沖になづさふ (巻三・四三〇)

〔訳〕多くの雲の涌き出する出雲の乙女の黒髪は、吉野川の水中を漂っている。〕

3. 柿本人麻呂の「水」の哲学

【資料8】柿本朝臣入麻呂、石見国より妻を別れて上り来る時の歌二首并せて

たんか
短歌

石見の海 角の浦廻を 浦無しと 人こそ見らめ 濁無しと 人こそ見らめ よしあ
やし 浦は無くとも よしあやし 濁は無くとも いさなとり 海辺を指して わた
づの 荒磯の上に か青く生ふる 玉藻沖つ藻 朝羽振る 風こそ寄せめ 夕羽振る

波こそ来寄れ 波のむた か寄りかく寄る 玉藻なす 寄り寝し妹を 露霜の 置き
てし来れば この道の 八十隈ごとに 万たび かへり見すれど いや遠に 里は離
りぬ いや高に 山も越え来ぬ 夏草の 思ひしなえて 惚ふらむ 妹が門見む 靡け
この山 (巻二・一三二)

反歌二首

石見のや 高角山の 木の間より 我が振る袖を 妹見つらむか (巻二・一三三)
小竹の葉は み山もさやに さやげども 我は妹思ふ 別れ来ぬれば(巻二・一三三)
つのははふ 石見の海の 言さへく 辛の崎なる いくりにぞ 深海松生ふる 荒磯に
ぞ 玉藻は生ふる 玉藻なす 靡き寝し児を 深海松の 深めて思へど さ寝し夜は
いくだもあらず 延ぶつたの 別れし来れば 肝向かふ 心を痛み 思ひつつ かへり
見すれど 大船の 渡の山の 黄葉の 散りのまがひに 妹が袖 さやにも見え
妻隠る 屋上の山の 雲間より 渡らふ月の 惜しけども 隠らひ来れば 天伝ふ
入日さしぬれ ますらをと 思へる我も 敷妙の 衣の袖は 通りて濡れぬ
(巻二・一三五)

反歌二首

青駒が 足掻きを速み 雲居にぞ 妹があたりを 過ぎて来にける (巻二・一三
六)

秋山に 落つる黄葉 しましくは な散りまがひそ 妹があたり見む (巻二・一三
七)

(訳)へ一三一 番歌(石見の海(今の島根県西部)の角(今の島根県江津市都野津町のあた

り)の海辺を、入江になった浦がないと、人は見ているだろうが、遠浅ひがたになった干潟がないと人は見ているだろうが、たとえ浦がないとしても、たとえ干潟がないとしても、(いさなとり)海辺をめぎして、わたづの人氣ひとけのない磯のあたりに、青々と生い茂る美しい藻・沖の藻に、朝鳥の羽ばたきのように、風こそが寄せて来るだろうから、夕鳥の羽ばたきのように、波こそが寄せて来るのだから、その波と一緒にあちらこちらへと寄り従う美しい藻のように、寄り添って寝たあなたを、(露霜の)道に置く冷たい秋の露のように(そのまま置いて来てしまったので、この道の数え切れないほど多くの曲がり角のたびに、何度も何度も振り返って見るけれども、いよいよ遠くあなたの里は遠ざかってしまった。いよいよ高く境の山を越えて来てしまった。(夏草の)夏草が秋になって萎れるように(思い萎れて今まさに私のことを思いやっているだろう、あなたの家の門を見よう。靡なびき伏せよ。この山よ。

〈一三二番歌〉石見の高角山(角の地の高い山。今の島根県江津市都野津町の東方に聳える島ノ星山かとされる)の木の間に私が振る袖をあなたは見ただろうか。

〈一三三番歌〉ささの葉は山全体に響き渡るようにざわめくけれども、私はあなたのことを思う。別れて来てしまったから。

〈一三五番歌〉(つ)のさは(ら)石見の海の(言)々々(こ)ぼの通じ(こ)く(辛)の崎(所在未詳)にある岩礁がんしょうに深海松ふかみゑ(海底深く生えるミル科の海藻)は生える。人氣ひとけのない磯に美しい藻は生える。その美しい藻のように横になって寝た妻を、深海松のように深く心に思うの(こ)緒いとに寝た夜はいくらもありません。(延はぶつたの)蔓つるが延びて別れるツタのように(別れて来たので、(肝向きむむか)心こゝろが痛んで、妻を思いながら振り返って見るけれども、(大船おおふねの)渡わたの山(所在未詳。今の島根県江津市渡津町の、江ノ川右岸の山かとされる)のみじが散り乱れて、あなたの振る袖もはつきりと見えず、(妻隠つまかくる)屋上やかみの山(所在未詳。今の島根県江津市浅利町の室神山(浅利富士)かとされる)の雲間を渡る昼間の白い月が隠れるように、名残

惜しいけれども、その袖も隠れていくと、(天伝ふ)夕日がさしたので、ますらおへ立派な男子官人へと自負していた私も、(敷妙しきた)の(衣い)の袖は涙で濡れ通ってしまった。
へ一三六番歌く青駒あおこまの足のあゆみが速くて、もう空の果てにあなたの家のあたりを後にして来てしまった。
へ一三七番歌く秋山に散るもみじよ。しばらくは散り乱れるな。あなたの家のあたりを見よう。]

4. リビンドン・リナー・ワ・タゴールの作品における「海」

【資料の9】『キタンジャリ』(英語) 八七番

In desperate hope I go and search for her in all corners of my room; I find her not.
My house is small and what once has gone from it can never be regained.
But infinite is thy mansion, my lord, and seeking her I have come to thy door.
I stand under the golden canopy of thine evening sky and I lift my eager eyes to thy face.
I have come to the brink of eternity from which nothing can vanish—— no hope, no happiness, no vision of a face seen through tears.
Oh, dip my emptied life into that ocean plunge it into the deepest fullness. Let me for once feel that lost sweet touch in the allness of the universe.
絶望のうちにも一縷いちろうの期待にかられて わたしは 家の隅々まで 彼女を捜し求めますが、彼女の姿は見つかりません。
わたしの家は小さく、ひとたびこの家から失せたものは二度と帰ってくるかと

はできません。

しかし、主よ、あなたの館やかたは無限です、そしてわたしは、彼女を捜し求めて、あなたの戸口まで来てしまいました。

わたしはあなたの夕空の金色の天蓋てんがいの下に立って、熱望するまなざしで、あなたの顔を仰ぎます。

わたしはなにひとつ消え失せることのない 永遠の岸边にたどりつきました——
希望も、幸福も、涙ながらに見た面影も、ここから消えることはありません。

おお、わたしの虚ろな生命うつつみを あの大海おおうみに浸してください、深い豊饒の海の底に沈めてください。いまいちど、あの失われた甘やかな感触を 全一の世界のなかで感じさせてください。

(森本達雄訳、小松が一部変更)

【資料10】森本達雄の解説

言うまでもなく、この詩は亡き妻への烈しい恋慕の思いをうたったものであるが、同時に「彼女」は、人間の肉体を離れた魂の象徴であり、大いなる世界霊への人間の魂の回帰のあこがれの歌でもある。この不死なる魂への確信から、詩人は最後に訴えるのである——この虚ろな生命を、生死の根源である大海に浸してください、そして、妻との失われた甘やかな感触を、生死を超えた全一の世界のなかで感じさせてください、と。「…」タゴールは生涯、生死の境のない全一の世界のなかで、妻を愛し、妻とともに生きていたのであろう。(森本達雄『タゴール 死生の詩 新版』四二〜四三頁)

【資料11】『ギタンジヤリ』(英語) 六〇番

[...] Death-dealing waves sing meaningless ballads to the children, [...]

[...]死をもたらず波は、意味のない物語を子供たちに歌ってきかせる。 [...]

(渡辺照宏訳)

【資料12】『キタンジャリ』（英語） 100番

I dive down into the depth of the ocean of forms, hoping to gain the perfect pearl of the formless. [...] And now I am eager to die into the deathless.

形なき完全な真珠を求めて、私は形ある海の底にもぐる。 [中略]

そこで今は、死んで不死に到達したいと切望している。

(渡辺照宏訳)

5. 人麻呂とタゴールの〈水〉の哲学が告げているもの

▼ 人麻呂とタゴールによれば、〈水〉は、身体的にも心的にも人間を癒す力を持つ。

8

▼ この〈水〉の聖なる力は、喪失や〈死〉とも深く関わっており、それははるかに人間の力を超えたものである。

▼ 人間は、その歴史の初期から〈水〉を「コントロール」しようとしてきた。

▼ 人麻呂の生きた七世紀後半に、飛鳥清御原宮を流れる飛鳥川は、都市開発によって氾濫するようになっていた。宮廷は人工的にその流れを統御した。

▼ 人間が生存するためには〈水〉を「コントロールせざるをえない」。

▼ しかし、人麻呂とタゴールの〈水〉の哲学は、我々に、人間の力を超えた、

〈水〉の聖なる力を思い起こさせる。

▼ 異なる時代に、遠く隔たった場所で生きた二人の詩人が示した、〈水〉に対する親しみと深い敬意は、人間の〈生〉を豊かにするものであり、むしろ、

自然と人間の複雑に絡み合った関係を一層強固とするものである。